

館報 教育記念館

No.67

平成18年11月 発行



秋山仁先生 スペシャル授業
「自分の頭に発想の泉を
揺り起こそう」



秋山先生 シャンソンを熱唱！



秋山仁研究室開発教具



恒例展 マセマティカル・ワールド展「紙と折りと算数・数学」

主な内容

- ◎教育時評 富山県小学校長会 会長 塚田 峻三 2
- ◎特別展「富山県の女子教育 100年のあゆみ」展 3
- ◎第16回 郷土の先賢顕彰者
 - 吉田 忠雄 ●安部 清 4
 - 小寺 菊子 ●川崎 順二 5
 - 川辺 外治 ●堀田 くに 6
- ◎「秋山仁先生・スペシャル授業」「マセマティカル・ワールド展」
財団支援事業、今後の予定 7
- ◎恒例展「富山県版造形教育作品展」「子どもの目、自然不思議発見写真展」 8



発行所／財団法人 富山県ひとづくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町1-5-1
 ☎(076)444-2000 ☎(076)444-2001 E-mail:toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
 (教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076)433-2770)
 発行人／富山県教育記念館 館長 齊藤和夫 印刷所／株式会社宮越印刷



温もりと「自信」の回復

富山県小学校長会
会長 塚田 峻三

最近、学校を評して「元気がない」「活力が見られない」といった言葉を耳にすることがあります。その要因は、日々、子供の健やかな成長を願って教育実践をしているにもかかわらず、「不登校」「規範意識の欠如」をはじめ、生徒指導や学力等の問題等が山積しており、確固たる自信や信念をもって行動できないことにあると考えます。

特に、最近、所謂「いじめ」等が要因で、自らの命を絶つという痛ましい事件が続発し、学校がさらに萎縮してしまったように感じています。

テレビのチャンネルを回せば、人を擲論したり、揚げ足をとってからかったりすることが日常茶飯事で、その言葉遣いや態度・行動には、礼儀とか思いやりといったものが全く感じられません。

多くの子供たちがそれを目の当たりにし、何の疑いもなく吸収して、それが当たり前と勘違いするとしたら、実に空恐ろしいことです。

学校や地域社会の努力にもかかわらず、なかなか「いじめ」が根絶できないのも、人と人との心のかかわりあいの素晴らしさや品性とか品格とかといったことが忘れ去られているような昨今の風潮にも、その要因があるように思われます。

道元の「正法眼蔵」の中に「愛語」という項があり、『愛語といふは 衆生をみるにまづ慈愛の心をおこし 顧愛の言語をほどこすなり…。愛語よく回天の力あることを学ぶべし…。』と述べています。愛語は、「やさしさ」「温かさ」「思いやり」にあふれた言葉です。

我が校の児童会が、学校中を「ふわふわ言葉」や「思いやりの心」で満たそうと「あったかハート大

作戦」という活動を展開したことがあります。「おはよう」「ありがとう」「すごいな～」「よくがんばってるね」等々、子供たちは友達同士で盛んに「ふわふわ言葉」を掛け合います。

ふんわりとした心地よい言葉を掛けられれば、誰でも自然と顔がほころび、心が楽になります。この児童会の活動中も、子供たちの表情が目に見えて明るく、穏やかになっていきました。まさに『愛語よく回天の力ある』の如しでした。

「箸よく盤水を回す」という言葉があります。

大きな器に水を張り、その中心部に箸を立てて小さな円を描くように回しますと、はじめは箸の周りの水しか回転しません。しかし、続けるうちに水が水を呼んで勢力を増して、回転の輪が次第に大きくなり、やがて全体の水を回します。

「一人の力は決して小さくない」ことを教えてくれています。

この混迷の時代、「自分一人の力では…」でなく、「自分一人の力でも…」という心構えで、教育指導の更なる充実に向けて、自ら対象に働き掛けることが求められます。

教育は人を対象とし、その結果は直ぐには明らかになりません。しかも子供一人一人にとっては、一回限りでやり直しがききません。そんな意味でも、今後、子供たちの成長に責任を負う私達への期待はますます大きくなっていくことでしょう。

常に心の温もりや微笑みを失うことなく、また日々、研鑽に励み、自ら自信の回復に努めることを通して、一層の信頼確保に向けた取組みを積み重ねていきたいと思っています。

《特別展》

「富山県の女子教育 100年のあゆみ」展

春季展 4月22日(土)～6月2日(金)

+++++

展 示 内 容

+++++

- ・実学を重視した「女寺子屋」
- ・小学校の誕生！しかし低かった女子の就学率
- ・難産だった「高等女学校」の誕生
- ・あとに続かなかった高等女学校の創立
- ・家政系の科目を増やした実科女学校の誕生
- ・相次ぐ市町立の実科高等女学校の創立
- ・めずらしい「技芸学校」
- ・充実をすすめた女子中等教育
- ・実科高等女学校から高等女学校への転身
- ・男子だけの農学校に「女子部」誕生！
- ・戦時下の女子教育
- ・波乱に満ちた新制高等学校の誕生
- ・富山県立富山女子高等学校の復活
- ・男女共学化の風潮の中で、進む女子高校の共学
- ・富山県女子中等教育を支えた私立の女子高等学校
- ・数しい歴史をもつ高等女子教育機関

- ・女子教育に大変な試練の時があったので驚きました。
- ・極めて貴重な資料(教科書、机、写真、風俗等)が展示されていました。明治、大正、昭和の学校史を語るものです。今後大切に残し、後世に伝えてほしいです。
- ・当時の女学生の生活ぶり、社会性、時代を絡ませたの説明は、価値観が明確になり興味深く拝見しました。

— アンケート(感想)より



夏季展 8月1日(火)～8月31日(木)



「春季展だけでは多くの方々に見てもらえないのでは。夏に富山へ帰省された方々にも参観してもらえるようにしてはどうか」という要望が強く、夏季展も開催しました。春季展の展示パネルに加え、以下の高等学校(女学校を前身に持つ高等学校、戦後に女子校として創立した高等学校)に、それぞれの学校のあゆみを紹介するパネルを製作、出品していただきました。

- | | |
|--------------|------------|
| 泊高等学校 | 八尾高等学校 |
| 富山いずみ高等学校 | 高岡西高等学校 |
| 石動高等学校 | となみ野高等学校 |
| 南砺総合高等学校 | 福光高等学校 |
| 龍谷富山高等学校 | 新川みどり野高等学校 |
| 富山国際大学附属高等学校 | |

平成15年度研究紀要

「富山県の女子教育 100年のあゆみ」

※少々残部があります。購入希望の方は県教育記念館へ

第16回 郷土先賢室顕彰者紹介

「善の巡環」という経営哲学に基づき、
世界的企業を創り上げた実業家



吉田 忠雄

明治41年～平成5年
(1908～1993)

吉田忠雄は、明治41年(1908)下新川郡下中島村住吉(現在の魚津市)に父久太郎、母セツの三男として生まれた。高等小学校を主席で卒業するが、家計が苦しく、兄の店で働き始めた。

20歳の時に貿易商を志して上京し、中国陶器を輸入する古谷商店を頼り就職。5年後、店がファスナーの輸入販売を始めたのが吉田とファスナーとの出会いとなる。しかし、古谷商店は倒産、吉田は昭和9年(1934)、サンエス商会を設立して独立した。自らの手でファスナーの部品を加工、販売し、それによって得られた利益を消費者、関連企業、自らの会社で分配することによってお互いが繁栄するという「成果三分配」を実践し、事業を拡大していった。

東京大空襲で工場が焼け、魚津に戻った吉田は、吉田工業株式会社を立ち上げ、ファスナー生産を再開した。吉田は、ファスナーの輸出を目指し、外国製に負けない安く品質のそろった製品を作るため、事業の存亡を賭けていち早くチェーンマシンを導入し、機械化を推進した。吉田は、新しい技術や生産機械の開発、原料から製品までの生産一貫体制導入など、品質のよい商品を安定して提供するための工夫や努力を惜しまず、ファスナー用の布テープやその原料の糸、工場で使う機械までも自分の会社で作上げた。

常に吉田の心にあったのは、社会や人のために貢献できてこそ会社の価値が生まれるという信念であった。これは、アメリカの鉄鋼王アンドリュー・カーネギーの生き方から学んだ「他人の利益を図らずして自らが栄えることはない」という考え方に基づくもので、彼自身の生き方、そして、会社経営の原点として、自ら考案した「善の巡環」という言葉に表されている。

平成5年(1993)、世界のファスナーの半分を生産するまでに会社を育て上げた創業者吉田忠雄は、84歳でその生涯を閉じた。

専門員 戸田 哲彦

縫製技術の近代化を確立した人



安部 清(通称精二)

明治35年～平成9年
(1902～1997)

安部清(精二)は、明治35年4月19日水見市早借、上島家に生まれた。生まれてすぐ、新湊市堀岡、安部家の養子となった。安部がまだ小さいころ養父が亡くなったため、家計を助けるために働かねばならず苦勞して育った。

大正4年(1915)堀岡尋常小学校卒業後、東京に出て子供服製造「緒方商店」に入社し、3年間で番頭になった。

大正13年(1924)婦人服の技術を身に付けたいと考え、婦人洋装ミヤコ商会縫製部の山室仙蔵に師事した。

昭和3年(1928)独立して、子供服縫製加工「あべ」を創設した。昭和18年(1943)本格的に子供服を製造し始めたころ戦争が激しくなり疎開した。昭和24年(1933)東神田に株式会社「ベビー」を設立し、「かわいい形、親切な仕立、売りよい値ごろ」を営業方針に掲げ、礼儀を大切に、買う人の立場を重視して仕事に邁進した。安部の考えたベビー服は色も形も工夫され、男の子にも女の子にも合った作りになっていたのが大変人気が高かった。

昭和36年(1961)婦人子供服日本工業規格(JIS)寸法原案作成委員長となり、全国統一の婦人子供既製服標準規格寸法の制定に取り組み、技術開拓に道を開いた。

昭和51年(1976)には、全日本技能協会副会長となり、業界での揺るぎない地位を築いた。これは、海外の優れた立体裁断技術を取り入れ、洋裁技能オリンピックに日本が参加できるまでに縫製技術を進歩発展させたことが認められたものである。

安部は生涯にわたり子供服の製造技術の進歩に貢献する一方、数十年にわたり、県内の小中学校に図書、テレビ、ピアノ等の学校備品を寄付するとともに、僻地勤務教職員交流や青少年健全育成活動にも寄付するなど、企業活動で得た利益を社会に還元し続けた。このような「人の喜びが我が喜び」とする安部の考えや人柄、仕事の実績が評価され、昭和42年(1967)自治大臣賞、昭和52年(1977)勲六等単光旭日章など多くの賞を受けている。

平成9年(1997)95歳で永眠。日本の縫製技術の進歩発展に尽くし、次世代を担う子供たちへの援助を惜しまなかった一生であった。

専門員 北川 奉秀

女の人生を描き続けた女流作家



小寺 菊子

明治17年～昭和31年
(1884～1956)

小寺菊子は、明治17年(1884)富山市旅籠町で売薬業を営む尾島英慶、ヒロの二女として生まれた。尾島家はもと水橋町にあって、祖父は村長をしたこともある家柄であったが、父が藩札贋造事件にまきこまれ、菊子が生まれた頃はすでに旅籠町に移り住んでいた。贋造事件が長く尾を引き、父が獄につながれたことから、家は没落の一途をたどった。

明治33年(1900)17歳の時、従姉妹の樽井ふさを頼って上京し、第一高等女学校に入学するが、間もなく中退した。その後、東京高等工業学校(現在の東京工業大学)のタイピストとして就職、働きながら文学の道に励むようになった。

菊子は、明治35年(1902)ごろ郷土出身の作家三島雷川の紹介で、徳田秋声の門に入り、本格的に小説の勉強に取り組んだ。第一作目として秋香のペンネームで「破家露」を発表し、その後「妹の縁」「赤坂」などで次第に知られていった。

明治44年(1911)「父の罪」が大阪朝日新聞の懸賞募集小説の次席に当選し、女流作家としての地位を確立させた。また、その年に平塚雷鳥によって創刊された雑誌「青鞥」のメンバーに加わるとともに誌上に作品を発表した。その後も「父の帰宅」「河原の対面」や「哀しき祖母」「朱鷺燭の灯」などを発表、父や母、祖母、自分を通して、女の苦闘を痛みを持った言葉で描いた。中でも「哀しき祖母」は富山女の心情を描ききった秀作である。

大正4年(1915)洋画家の小寺健吉と結婚、幸福な家庭生活を送ったが、昭和22年(1947)の秋に脳溢血で倒れ、昭和31年(1956)10年間にわたる夫健吉の看病の甲斐もなく、ついに帰らぬ人となった。

菊子は、田村俊子、岡田八千代とともに「大正の三閨秀」ともはやされたが、その作品は自分の家の逆境を題材としながら深く人間の心を見つめ、人生をしみじみと考えさせるものであった。

専門員 森田 洋子

「民謡おわら」を芸術の域まで高め、 今につないだ人



川崎 順二

明治31年～昭和46年
(1898～1971)

医学博士。明治31年(1898)3月、八尾町東町(現、富山市八尾町)の川崎五郎兵衛の長男として生まれた。川崎家は、由緒ある家柄で代々五郎兵衛を称し、医業と薬舗を営んでいた。

川崎は、大正11年(1922)3月、金沢医学専門学校(現、金沢大学医学部)を卒業し、大正14年(1925)4月に自宅で医院を開業し、医療に専念した。医学の研究に没頭するかたわら、自ら書画を描き、また、日本の伝統芸能にも造詣が深く、著名な歌舞伎俳優にも知り合いが多かったという。

大正13年(1924)の春、「民謡おわら研究会」が設立され、その理事長に推薦されたのが「民謡おわら」との最初の出会いであったという。その後、昭和4年(1929)5月、「越中民謡おわら保存会」が設立されると、その会長となり、以来40年以上一貫して「民謡おわら」の発展に莫大な私財を投じるとともに、その生涯を賭けた。

川崎は、伝統的な歌詞を保存すると共に、年々新作を広く全国から募ったり、昭和4年には若柳流宗家吉三郎師を招いて新作踊りの振り付けを計画し、男子舞、女子舞を創作したりするなどおわらの普及に努めた。特に豪快、優雅なその踊りは繊細な旋律と素朴なおわらの情緒にマッチして広く大衆にアピールするものとなった。

また、「おわらはプロ化してはいけない、あくまで素人であることに価値がある」として、民謡の文化的価値を啓蒙するとともに、会組織の近代化を図り、その強化に努めた。

長年、郷土文化に貢献した功績により昭和37年(1962)、全国民謡協会から民謡功労賞、同38年(1963)、八尾町長から文化功労賞、同42年(1967)11月、北日本新聞社より北日本文化賞、富山県知事より文化功労者賞をそれぞれ受け、同44年(1969)11月、勲五等双光旭日章を叙せられた。川崎は今日の魅力ある「民謡おわら」を創り上げた大恩人と言える。

昭和46年(1971)11月、人々に惜しまれつつ永眠した。享年73才。葬儀はおわら葬であった。

専門員 松本 純

教職に就きながら、 県洋画界の振興に寄与した画家



川 辺 外 治

明治34年～昭和58年
(1901～1983)

川辺外治は、明治34年(1901)2月4日砺波市苗加に生まれた。大正5年(1916)、16歳で富山県師範学校に入り、曾根末次郎に写生を学んだ。大正7年(1918)、病死した兄に代わって農業を継ぐために師範を中退しようとするが、先生たちに止められた。師範を終えて福野小学校に奉職し、教職のかたわら好きな画の勉強を続けた。

昭和2年(1927)、東京府専科図画教員試験に合格し、翌年、富山県から出向という形で上京した。この頃から本格的にデッサンを始め、日曜日には曾宮一念に師事した。

昭和7年(1932)、4年間の東京での研鑽を終えて帰郷し、県立砺波高等女学校に転任した。以後、美術教育者として多くの時間を費やす一方、自宅にアトリエを構え、自らも洋画家として本格的な創作活動を展開した。

昭和12年(1937)、「草刈り子供」で大潮展特選を受賞するなど公募展での受賞を重ね、昭和16年(1941)の第4回新文展に「忙中の食事」を出品し、洋画では県内からただ一人という入選を果たした。この作品は三井コレクション買い上げとなり、これを機に、川辺は美術教師の東一雄らと「一杏会」を結成した。

戦後、戦争で疲弊した県下美術界の再生に努め、昭和21年(1946)、県洋画連盟発起結成、疎開作家5氏を砺波高等女学校に招いての大講習会を開催するなど、大きな役割を果たしている。

昭和24年(1949)10月、前年から奉職していた出町高等学校(後の砺波高等学校)がほぼ全焼し、教頭として復興にあたった。また、その頃高校生だった林清納らへの美術指導も行っている。

昭和28年(1953)の第9回新文展に「老人と山羊」、以後「小使室の老人」「石佛を刻む」「石燈籠の見える石屋」「養鶏の老人」などを連続して出品したが、昭和33年(1958)に新日展になってからは出品せず、この年ジャンルを超えて県内の美術家を結集して「彩彫会」を結成した。

教育者として画家として、情熱と気概をもって県洋画界や美術界の振興に寄与したのが川辺外治である。

昭和58年9月29日、82歳でその生涯を閉じた。

専門員 白江 勉

保育事業の先駆者



堀 田 く に

明治31年～昭和60年
(1888～1985)

射水郡伏木町(現高岡市)で代々続く回船問屋堀田善右衛門の四女として明治21年(1884)に生まれた。

高等女学校卒業後、篤志看護婦として務めた後、回船問屋を切り盛りした。その行動力から伏木町婦女会長に推されたくには、伏木港の倉庫の軒下や石炭山の間一日中置き去りにされている子供たちの姿に心を痛めた。大正から昭和にかけては農村の疲弊が著しく、仕事を求めて近郊から多くの主婦たちが集まった。港で女仲仕(船の荷役)として朝5時半から真夜中に至るまで働く彼女たちの中には乳呑み児を抱える者もいた。冬などは寒風が容赦なく吹きすさぶ中、その子らの上に雪が降り積もるといふ悲惨な状態であった。また、栄養失調から「くる病」を患った子供が多く、中には岸壁から海に落ちるなどの事故に遭う者もいた。このような惨状を見るに忍びず、大正12年(1923)、くには堀田家ゆかりの尼寺を借りて、無料で子供を預かり始めた。県内で初めての託児所であった。

さらにくには、堀田家も経済的に厳しい中、婦女会員と協力し託児所建設の資金づくりを始めた。しほり染めや刺繍の内職、運動会のお寿司づくり、映画興行などに奮闘し、大正15年(1926)、23坪の遊戯室を造り、県の許可を得て、伏木託児所を開所するに至った。日一日と託児数が増え、昭和4年(1929)には第二託児所を新設。その後、一宮(現伏木保育園)の土地を買い取ったが、地盛りは婦女会員の手で行うという厳しいものであった。

戦中戦後の混乱期を乗り切ってきた堀田くには、昭和56年(1981)まで伏木保育園の園長を務めた。働く女性とその子供たちのために尽くした功績により、昭和17年(1942)に厚生大臣表彰、同29年(1954)には藍綬褒章、同39年に勲五等宝冠章が授与された。昭和60年(1985)、97歳でその生涯を閉じた。

専門員 村中 祥華
関原 秀明

秋山仁先生スペシャル授業

● 7月24日(月)10:30~12:00



今年も秋山仁先生担当の「スペシャル授業」「算数なるほど納得!ゼミナール」は大人気。計約120名の申し込みがありました。

「高校の数学内容を小学生にもわかるように授業するのが私の信条」と話されるだけあって秋山先生のスペシャル授業ふりはたいしたものでした。東海大学教育開発研究所・秋山研究室で開発された教具をふんだんに用いて、一切数式や計算などを使わずに、サーカス仕立てのおもしろくて楽しい算数・数学ショーでした。

マセマティカル・ワールド展

● 7月15日(土)~9月10日(日)



今回は、日常品として何気なく使用している用紙「A版紙、B版紙」にひそむ $1:\sqrt{2}$ の縦:横の比や黄金比の世界、日本の伝統的折り紙(連鶴、ユニット折り紙、多面体など)にひそむ算数・数学の世界を来館者のみなさんに体感してほしいと企画展示しました。

※幼い頃のすっかり忘れてしまっていた折り紙に、日本の美を再発見した思いです。数学との関連もおもしろいし、奥深い世界だと思いました。
※上手には作れなかったけど、身近な折り紙がこんなにおもしろくとは思わなかった。

——アンケート(感想)より

元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業 主催(財)富山県ひとづくり財団

平成18年度 「学ぼう!ふるさと未来」支援事業 (助成対象校1校に10万円助成)

助成校	研究主題
射水市立中伏木小学校	「いのち」をみつめ、かかわり合い、学び合う教育活動の工夫
南砺市立井口小学校	椿を通して、郷土の自然や歴史・文化に関心をもって活動し、ふるさと井口を愛する心を育てる。
富山市立清水町小学校	主体的に学び合い、高まり合う子供の育成
射水市立金山小学校	ふるさと金山 感じ 考え 広げよう
富山市立古沢小学校	古沢の豊かな自然の中で、主体的に学び合い、高め合う子供の育成

平成18年度 「水みらいプロジェクト」支援事業 (富山県ひとづくり財団及び富山・水・文化の財団から各5万円助成)

助成校	研究主題
入善町立飯野小学校	「いのち」を育む水一飯野の水環境を考えよう
立山町立釜ヶ淵小学校	かまがふちの水
富山市立芝園小学校	松川をきれいにしよう
富山市立岩瀬小学校	くらしを支える水の行方
高岡市立二塚小学校	二塚環境探検隊
南砺市立利賀小学校	利賀の水を守り隊
高岡市立南星中学校	千保川の水質と生物
氷見市立西部中学校	学校ビオトープとため池周辺の水環境のネットワーク化

中学生・高校生・高専生によるロボット展 アイティアロボットフェスタ

県内の中学生、高校生、高専生が制作したロボットを一堂に展示します。

◎期 間 平成18年12月16日(土)~平成19年1月28日(日) 午前9時~午後4時30分

※休館日 12月23日(土)、24日(日)、年末年始、1月6日(土)~8日(日)

1月13日 開会式、パロの柴田氏による講演、ロボットづくり(小学校対象、要申込み)
14日 ロボットづくり(中学生対象、要申込み)
1月13日、14日、21日、28日 展示してあるロボットのデモンストレーション

※詳細は各校に届けられている案内パンフレットをご覧ください。

◎会 場 富山県教育記念館 1階 多目的ギャラリー

※観覧料は無料



第25回 富山県版造形教育作品展

6月10日(土)～7月9日(日)



ポスター

今年2月に、射水市小杉文化ホール「ラポール」で行われた「第36回富山県版造形教育展」に入選した1,220点の中から選ばれた優秀な作品109点と保育所・幼稚園からの共同作品4点が展示されました。

「版画は、白・黒というイメージでしたが、大胆な色や技法を使って表現してあったので、びっくりしました」といった来館者の感想(アンケート)がありましたが、教育記念館1階多目的ギャラリーは、夢のある楽しい世界となりました。

その作品の中から、さらに特選作品として、21点が選ばれました。



作品展示会場

「富山県版造形の会」会員の版画作品

幼稚園・保育所の共同作品

「子どもの目・自然不思議発見写真展」

9月24日(日)～10月15日(日)



「うそをついたのかな?ピノキオトマト」



「花時計」



「とうせんぼ」

県内小学校39校、中学校6校より200点の写真作品応募がありました。

当初は入選選考をとも考えていたのですが、作品やそのコメントには、子供たち一人ひとりの感動が素直に込められ、選別の余地などなくなりました。

小さい子供たちの「大きな大きな写真展」でした。休日には、家族づれの来館者も多く、たっふりと作品を楽しまれた様子でした。



「夕日が最大限に光り輝く時」



「ブロッコリーのDNA」



「せみのたん生」



「手に虹が」



「わあっ!びっくり!初めて見た米の花」



「あ/と/が/き/」

今年度も、教育記念館1階多目的ギャラリーで特別展や恒例展を開催しました。その展示物作成や応募作品については、多くの先生方のご協力がありました。感謝申し上げます。

この館報が皆様のお手元に届く頃には、教育記念館3階の郷土先賢室での新しい顕彰者展示が始まっています。どうぞ、富山県教育記念館へお出かけください。